

タイトル頁に FDC を置いての作品解説、文章だけの頁はなく、郵便種別および料金ごとに当該カバーを配す、が主軸で、重量便や書留書状も都度取り入れ、特殊な使用例や外国郵便を付加、切手シリーズごとまとめた作品です。当時のハンガリーはオーストリアの郵便制度が施行されており、サービス内容は本国と同一でしたが、1867年に二重帝国であるオーストリア・ハンガリー帝国が発足、第一次大戦後に独立したことで、昔からオーストリアでのハンガリー使用がポピュラーで、専門収集家グループもあり、G. S. Ryan の郵便印ハンドブックをはじめ多くの文献が刊行されています。珍品の Tokay ルレットやバイセクト使用もハンガリーでの産物です。郵便史の審査員 Denes Czirik 氏（ハンガリー）に作品ストーリーおよび今般の大金賞授与の十分条件につき詳しい解説をいただきました。特別賞は多くの珍しいマテリアルに対するものです。

ニューヨーク展から質・量とも大幅なレベルアップ、分かり易いストーリーながら展示マテリアルの多くが珍品クラスで、筆者は目の保養としか言えない別世界に惹きこまれます。

した。各ページのヘッドライン、カバータイトル、カバー説明文とも申し分ないものでした。筆者の収集は伝統郵趣ですが、使用例の展示で、高価でなくとも何か Bergamini 氏が欲しくなるアイテムを入れたい、という欲にかられたことを告白します。

■郵便史が全盛

下表のパルマレスをご覧くださいなのですが、郵便史が伝統郵趣の 1.5 倍以上あり、まさに全盛です。G、LV および V の数がいずれも伝統を上回っており、郵便史人気の高さが伺えます。収友に訊いたところ、「マテリアルが入手し易く、ストーリー的にも作品を構成し易い。伝統郵趣は対象が広く奥行きも（郵便史より）深い」との返事が返って来ました。欧州に限らずこの傾向は今後も続くでしょう。

本稿の執筆にあたり、貴重な写真画像をご提供いただいた FINLANDIA2017 組織委員会、G. Douglas 氏、J. Voruz 氏、収友の H. Stepnizka 氏、A. Bergamini 氏、審査員の Denes Czirik 氏ほか、会場でお会いした方々に厚くお礼申し上げます。

(完)

＜パルマレス・部門別一覧＞

	LG	G	LV	V	LS	S	SB	B	合計
グランプリクラス	7								7
伝統郵趣	16	19	20	11	4				70
郵便史	6	45	33	21	4	1			110
収入印紙	1	2	2	2	1				8
航空郵趣		4	11	4		1			20
ステーションナリー	1	7	3	3	2	1			17
テーマチック	2	13	16	5	6	2			44
オープンクラス	1	3	3	3					10
ユース		1	4	11	8	6	3		33
文献	6	11	5	14	12	10	3	1	62
絵葉書		4	4	6	9	4	4	3	34
計	40	109	101	80	46	25	10	4	415
1フレームクラス*		2	9	16	10	2	3	3	45
合計	40	111	110	96	56	27	13	7	460

\*1フレームクラスはメダルはなくスコアのみ授与

FINLANDIA 2017 FIP 伝統郵趣セミナーに参加して

齋藤 環

■伝統郵趣部門の定義

伝統郵趣部門は、FIP 世界展および各大陸展（アジア、欧州およびアメリカ）の共通ルールである Special Regulations for the Evaluation of Traditional Philately at FIP Exhibitions（以下、SREV と記）の下、他部門には出品できないあらゆる作品をプロデュースしうる唯一の部門であることを、認識ください。

■SREV Article 2：根幹たる要素

伝統郵趣部門はあらゆる作品ストーリーを支持します。出品作品は、タイトル頁を筆頭にそのストーリーを語らなくてはなりません。展示しうる全ての適切なマテリアルが含まれるべきで、使用例については切手の抹消法、レート、ルート、郵便印、例外的貼付などが示されるべきです。

■SREV Article 3：用いられるマテリアル

—展示しうるマテリアル

1. 切手製成過程での産物：エッセイ、ダイプルーフ、プレートプルーフ、ブロックプリント、カラートライアルなど
2. 版欠点や紙両面印刷などの錯誤品
3. 未使用および使用済切手
4. 単片およびマルチプル、切手製造面の観点からブロックの意義は重要。シートは大きいので、これを使う理由を説明すべき

FINLANDIA 2017 会期中の 5 月 27 日正午から、「FIP 伝統郵趣セミナー」が開催されました。講師は FIP 伝統郵趣委員会チェアマンのスヴェンセン氏 (Lars Peter Svendsen デンマーク) で、筆者を含め受講者 19 名で行われました。内容は伝統郵趣部門の出品作品のあり方および審査基準に沿った作品の構築についてで、誰もが「なるほど」、「やはりそうか」と安心感を持って理解出来るものでした。パワーポイントにて具体的事例を示しながら、平易な英語で解説いただけただので、文字通り時間が経つのを忘れてしまう充実のひとつときでした。

本稿では講話より、興味深く感じられた点、国際切手展に出品される皆様に再認識いただきたい点を中心に報告させていただきます。国際展だけでなく国内展出品者にも参考になると存じます。本稿とともに FIP 伝統郵趣委員会のホームページ (<http://www.traditionalphilately.dk/>) も参照願います。



図1 セミナー受講光景、最前列が筆者